



オリンピックの記憶は 音楽とともに

酒井健太郎 (文化論・芸術学) Kentaro Sakai

スポーツと音楽の相性のよさはバツグンである。競技や試合のハイライト映像では、選手が奮闘し、歓喜し、あるいは唇を噛む姿が、音楽付きで、時にスローモーションで映しだされる。無音では間が抜ける。音楽が映像にどれほどの力を与えているかよくわかる。

リズムカルで一定のテンポがある音楽は、スポーツとよく似ている。身体の動きを音に変換して奏でるのが音楽であると考えれば、スポーツと音楽の根は同じ。相性がよいわけである。

オリンピックと音楽といえはなにが思い出されるだろう。2006年トリノでの冬季大会では、フィギュアスケートの荒川静香が、ブッチーニのオペラ《トゥーランドット》の音楽にのって見事な演技を披露した。開会式でルチアーノ・パヴァロッティが《トゥーランドット》のアリア「誰も寝てはならぬ」を絶唱したこともあって、日本

のスポーツ・ファンの多くに「誰も寝てはならぬ」とともに記憶される大会になった。(余談だが、開会式の歌唱は録音であったことが後に明らかにされた。そしてこれはパヴァロッティの人生最後のステージであった。)

少し遡ろう。1984年のロサンゼルス大会が与えた印象はまさに鮮烈だった。開会式ではファンファーレが高らかに鳴り響き、ジェット・バックを背負って空を飛ぶロケットマンが観客を驚かせた。マスコットはアメリカの国鳥ハクトウワシをモチーフにしたイーグルサム。「アメリカらしさ」に満ち溢れた大会だった。ファンファーレを作曲したジョン・ウィリアムズは、《ジョーズ》《スター・ウォーズ》《E.T.》《ハリー・ポッター》など数々の映画音楽の作曲家・指揮者で、1996年アトランタ大会、2002年ソルトレイクシティ大会にも作品を提供している。

初めてのアジア開催、1964年東京大会はどうかだっただろう。「オリンピック・マーチ」(古関裕而作曲)は、喜びに満ちたトリオと「君が代」を織り込んだコーダが印象的だった。古関は昭和を代表する作曲家のひとり。総作品数は5千を数えるという。早稲田・慶応と巨人・阪神のそれぞれの応援歌・球団歌のほか、NHKの「スポーツショー行進曲」(1947年)、高校野球の「栄冠は君に輝く」(1948年)、さらにはアニメ《ドカベン》の挿入歌「ああ甲子園」(1977年)もある。大会のファンファーレ(今井光也作曲)は短いながらも存在感があった。そのほか團伊玖磨「オリンピック序曲」、黛敏郎「オリンピック・カンパノロジー」が開会式で演奏され、「東京五輪音頭」「海をこえて友よきたれ」「東京オリンピックの歌」などの音頭・愛唱歌が人びとを高揚させた。また記念文化事業として東京都交響楽団が設立された。

1965年には公式記録映画《東京オリンピック》(市川崑総監督)が公開された。競技の模様だけでなく、選手、スタッフ、観客など、あらゆる人間の営みとしてオリンピックを活写し、映像作品として極めて面白い。音楽を担当したのは黛敏郎で、合唱、オーケストラのほか、ジャズやミュージック・コンクレートの手法が用いられている。



記録映画《民族の祭典》より(1938年公開)

作品最後の競技はマラソンで、そのなかにエチオピアのアベベ・ビキラがひた走るシーンがある。最初は声援に包まれている。オーケストラ音楽が始まると歓声がフェードアウトする。アベベの横顔がクロース・アップで捉えられ、程なくしてスローモーションになる。ホルンが吼える。忍耐強く走りつづけるアベベを音楽が伴走する。やがて勝利の栄光を先取りして、輝かしい音が鳴り響く。音楽と映像のみごとな融合によって、マラソンが自分自身との孤独な闘いであることを描き出した。圧巻である。

記録映画としては1936年ベルリン大会の《民族の祭典》《美の祭典》(レニ・リーフェンシュタール監督)がよく知られている。アスリートの超人性の美しさを捉えた作品で、《東京オリンピック》に比べるといくぶん堅苦しい。

1998年長野冬季大会の開会式での、ベートーヴェン「第九」の大合唱は記憶に新しい。長野、北京、シドニー、ベルリン、南アフリカ、ニューヨークの国連本部を衛星回線で結び、映像・音声伝達の時差を計算してミックスすることで、「歓喜の歌」を五大陸で合唱するというもので、平和の祭典にふさわしく、感動的だった。閉会式ではノリの良い「ILE AIYE~WAになっておどろろ〜」(長万部太郎/角松敏生 作詞・作曲)をバックに、各国の選手が入り乱れて踊った。会場が一体となって叫んだ「私達の故郷は地球!」は、いまこそ思い出すべき想いであろう。

1972年札幌冬季大会では、山本直純「白銀の栄光」、古関裕而「純白の大地」、岩河三郎「虹と



今なお愛される昭和のメロディメーカー
古関裕而(1909~1989)

オリンピックの記憶は音楽とともに

雪」などの行進曲が用いられた。大会テーマソング「虹と雪のパレード」(河邨文一郎作曲、村井邦彦作詞)は複数の歌手によるレコードが発売され、なかでもトワ・エ・モワによるものがよく聴かれた。かれらは大会の翌年に解散したが、長野オリンピックを機に、この曲を歌って活動再開を果たした。

ここまでオリンピックと音楽にまつわるエピソードを思いつくままに挙げてみた。オリンピックの思い出は音楽と切り離せないと改めて感じるが、実はオリンピックと音楽にはもっと古くて深い関係がある。つい70年ほど前まで、音楽はオリンピックの正式な競技種目のひとつで、優秀作品にはメダルが授与されていたのである。

近代オリンピック第1回大会がおこなわれたのは1896年、アテネでのこと。当初はスポーツ競技だけだった。近代オリンピックの提唱者ピエール・ド・クーベルタンは、オリンピックとは肉体と精神の「偉大な結婚」であると考えており、1912年のストックホルム大会から建築、文学、音楽、絵画、彫塑の5部門で芸術競技がおこなわれるようになった。音楽部門の初の金メダリストはイタリアのリカルド・バルテレミー「オリンピックの勝利行進曲」であった。日本が芸術競技に参加したのは1932年ロサンゼルス大会と1936年ベルリン大会で、ベルリンでは江文也「台湾の舞曲」が選外佳作に選ばれた。江は台湾生まれだが、台湾は1895年から日本の植民地であったため、日本代表として参加した。



芸術競技が始まった
ストックホルム大会(1912年)



激動の東アジア情勢に翻弄された
江文也(1910~1983)

1952年ヘルシンキ大会から芸術展示(メダル授与なし)に変わり、1992年バルセロナ大会からは文化プログラムとして実施されている。現在のオリンピック憲

章は、「オリンピズムはスポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」と謳い、「少なくともオリンピック村の開村から閉村までの期間、文化イベントのプログラムを催すものとする」と定めている。最近では、2012年ロンドン大会が、数万人のアーティストによる、18万回近くイベントに、4千万人以上が参加するという、かつてない規模の文化プログラムを実施した。クーベルタンの理想はこうして受け継がれている。

2020年東京大会では「日本文化の再認識と継承・発展」「次世代育成と新たな文化芸術の創造」「日本文化の世界への発信と国際交流」「全国展開によるあらゆる人の参加・交流と地域の活性化」をコンセプトにして、文化プログラムがおこなわれることになっている。今年7月には1964年の「東京五輪音頭」をアレンジした「東京五輪音頭-2020-」が発表され(歌は石川さゆり、加山雄三、竹原ピストル)、2020年に向けて機運を醸成する取り組みがなされている。

3年後に迫った東京大会では、どんな音楽が流れ、歌われ、踊られるだろう。大会はどんな音楽とともに記憶されるだろう。日本らしさを追い、同時に世界普遍的な価値を求めるものになることを期待したい。